

□一生の娯樂

麻布 六塚 陸幹

僕は小さい時畫の巧な一人の友をもちました、それは、鑿水引の紙にかく畫でしたが、友は時々水繪の事を語りました、それが私の幼い頭に水繪は淡くい、加減にごまかして描くものだと思はれました、そこで安い紙箱の繪具で雑誌の口繪を描きました、素より下手なのですぐやめました、併し卅五か六年の一月の青年界に三宅先生の日の出の水彩繪がありましたので又描く氣になりましたが、一年二年とたちましても無論上手になりません、一昨年の夏頃から繪葉書の流行のため水彩畫を描く友が急に殖えました、私も其の潮流に乗りましたが、友と戶外寫生しても下手の一人であります、私は畫才を持たぬのでせうが、而し失望はしません、決心はやゝ固くあります、私は専門家となろうとは思ひませんが、一生是を娯樂としようと思つて居ります。

□むだある記

遠野 垂 虹 生

去年の夏の日曜のことであつた。例の如く寫

生道具を取りそろへながら、其の方向を彼是と考へたが、ふと先年鮒釣りに行た松崎沼の



安久原松

夜月

こととした。河骨が咲いたり葦葉が浮いたりしてゐて、芦の茂みから翡翠が飛立つ風情、早目に浮ぶ。木立の影で暗い向岸の一角から、ずつと水草の生へてある水面の一部を寫したら、面白いものになりそうだと、もう胸の中に圖取迄がちゃんと出來上つた。道々目に付く景色の處々、それらは後廻しとして、只管目的地へと急いだ。

出ばつた山の鼻の、水田に續く處に、見覚えある大きな柳の木、あの陰が直ぐその沼である。漸く着て見ると、こは如何に、有し面影はからりと變つて、沼らしい跡もなく、唯一面の稻田、何の見處も無くなつて居た。畔に立て此方を見てゐる百性の顔迄が『御苦勞様』と云ひたげである

池野秋花

橄欖や小鹿の花をふくむ見えて、

むかし床かしきクリートの島。

ことが思ひ浮んだので、先づそこへ行て見る